

〔付記〕

本稿は、2010年度秋季同志社大学国文学会研究発表会における口頭発表に基づくものです。ご指導やご教示賜りました方々に、心より御礼申し上げます。

ている。

- ② 三上 (1972) は、「まともな受身」に、乙ガ甲ニ丙ヲ紹介サレタ。丙ガ甲ニ乙へ紹介サレタを、「はた迷惑の受身」に、母親ニ死ナレル、子供に泣カレルを例文に挙げた。
- ③ 石丸 (1985) は、「一人称視点」を「語り手が主役で登場し一人称で語る文章」とし、「三人称視点」を「三人称の主役に身をよせ主役の周辺に生起する事件を語る文章」と「作中に登場せず全知全能の『神の視点』から語られる文章」と分類した。
- ④ 中村 (2007) は、「三人称制限視点」を「主人公や主人公と行動をともにする作中の一人物(中略)ともかく一個人の知りうる範囲に限定された視点」とし、「三人称全知視点」を「すべての作中人物について(中略)熟知しており(中略)その物語世界の環境の歴史も現状も未来も何もかも心得ている、いわば神の視点。」としている。
- ⑤ 小森 (1983) は、「坊っちゃん」を「『好き嫌い』を基準にした〈私〉的言語としての語り」とし、「主観的で単純なものの方見方」をしており、「『おれ』の主観的な自己認識に即して言えば、『おれ』の行動原理は不変であり、一貫性を持っている」とした。
- ⑥ 柴田 (2005) は、「草枕」を「旅先となる那古井の温泉場は、主人公自らが望んで赴く旅の目的であるとともに、その行動も観照的態度に終始する」と指摘した。

【参考文献】

- 石丸晶子 (1985) 「文章における視点」『日本語学』4巻12号 明治書院
- 奥津敬一郎 (1983) 「何故受身か?—〈視点〉からのケーススタディー」『国語学』132巻
- 小嶋栄子 (2004) 「文学作品における効果的なうけみ文の使用」『21世紀言語学研究 鈴木康之教授古希記念論集』白帝社
- 小森陽一 (1983) 「裏表のある言葉(上)—『坊っちゃん』における〈語り〉の構造—」『日本文学』32巻3号
- 柴田庄一 (2005) 「『坊っちゃん』と『草枕』を読み返す—『語り』の視点を手がかりにして」『古典を読み直す』第17号
- 柴谷方良 (1997) 「『迷惑受身』の意味論」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 清水慶子 (1980) 「非情の受身の一考察」『成蹊国文』第14号
- 田中実 (1991) 「『ロマネスク』論〈再読〉を促す〈語り手〉の誕生」『国文学』第36巻4号
- 田口信吉 (2006) 「夏目漱石『坑夫』論—交錯する主観と客観」『甲南大学紀要文学編』143号
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版
- 中村明 (2007) 『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』勉強社
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』くろしお出版
- Mebed Sharif (2005) 「川端康成の『眠れる美女』と自由間接語法: ウルフの『ダロウエイ夫人』の文体との比較研究」『東海学園大学研究紀要人文学健康科学研究編』10号
- 渡部芳紀 (1974) 「津軽一作品の構造」『国文学』第19巻第2号

【使用テキスト】

テキストは、夏目漱石『漱石全集』(1993~1994) 岩波書店、森鷗外『鷗外選集』(1979) 岩波書店、太宰治『太宰治全集』(1998~1999) 筑摩書房、川端康成『川端康成全集』(1980~1981) 新潮社を用いた。

が多いのは、太宰治である。上記の二作家とは異なる結果であったが、これは作品の描かれ方によるものである。一人称小説「富岳百景」「津軽」は、主人公「私」が見聞したものを情景を交えて語る紀行文的な描かれ方であるため、「中立」の用例数が多いことが窺える。反対に、三人称小説「ロマネスク」「走れメロス」は、語り手が主人公や登場人物に近づき描かれることが多いため、「迷惑・恩恵」の受身が多く出現すると考えられる。

また、一人称小説でも三人称小説でも上記の三作家ほど用例数に差がないのは、川端康成であるが、作品毎に用例数に差が見られる。例えば、一人称小説でありながら写実風な日記文である「十六歳の日記」は、「中立」の受身が多い。一方、主人公に寄り添い描かれる三人称小説「千羽鶴」は、「迷惑・恩恵」の受身が多い。他方、語り手が主人公に融合する場合と独立する場合が見られる「眠れる美女」では、「迷惑・恩恵」「中立」のどちらにも受身の用例数が多いことが明らかとなった。

以上、限られた作品の中ではあるが、人称別に小説テキストの受身傾向を考察した。その結果、作家毎作品毎に受身表現の使用傾向は異なるが、用例数の数値差を細かく考察すると、一人称小説では主観的な描き方をする作品では「迷惑・恩恵」の受身表現が効果的に用いられ、登場人物や出来事を客観的に描く場面が多い作品では「中立」の受身が多く使用されていた。また、三人称小説では、語り手が主人公に寄り添って描かれる作品では「迷惑・恩恵」の受身が多く使用され、語り手が登場人物を客観的に描く作品では「中立」の受身が多く使用され、語り手が自由に登場人物に融合したり独立したりするような作品には、「迷惑・恩恵」「中立」の受身が多用される傾向を確認した。

このように、必ずしも一人称小説が「迷惑・恩恵」に傾き、三人称小説が「中立」に傾くというのではないことが明らかになった。一人称小説であるか三人称小説であるかは、主語が一人称「私」であるか、三人称「彼・彼女」であるかという形式にしかすぎず、受身表現の選択には、むしろ語り手がテキストを主観的に描くか客観的に描くかという点が大きな要因として指摘できるのではないかと思われる。

今後は、小説テキストにおける受身選択が対応する主語の文脈上の役割とどう関わるのかといった問題、能動形と受身形の出現数の問題、さらには受身の選択が文脈上の転換について果たす役割などの問題を課題としたい。

注

- ① 松下(1930)は、人格被動を(一)人、盗賊に殺さる。「自己被動」、(二)人、盗賊に物を偷まる。「所有物被動」、(三)父、子に死なる。「所有物自己被動」、(四)雨に降らる。「他物被動」と明記し

れて、娘が可愛くてしかたがないやうになると、自分がこの娘から可愛がられて（①A）ゐるやうな幼さへ心に流れた。 「眠れる美女」

「眠れる美女」は、先述したように「迷惑・恩恵」の用例数が6.3例と高い数値を示し、「中立」の用例数でも7.7例と他の作品より高い数値を示している。これは、「眠れる美女」の作品構造に関係があるのではないだろうか。②6を見ると、㉗～㉘の文は語り手が主人公から独立して外から客観的に「江口老人」の行動や心境を描いている箇所、①Bの「中立」の受身が見られる。一方、㉙～㉚は全体に語り手が主人公の「江口老人」に融合し観察した娘の様子や想いを語っている箇所、①Aの「迷惑・恩恵」の受身が見られる。Mebed（2005）は、「眠れる美女」の語りの手法を「センテンス毎の客観的語り手の報告から主観的な連想へという進行は、川端の作品の中で、主人公の思索と記憶を主なテーマとする『眠れる美女』の独特な手法である。」と述べている。この作品は、受身の使用傾向から見ても、他の作品よりも「迷惑・恩恵」「中立」どちらの受身の用例数も多く、Mebed（2005）が唱える「客観的語り手の報告から主観的な連想への進行」と共通すると考えられ、こうした語り手が自由に登場人物に融合したり独立したりする作品には、「迷惑・恩恵」「中立」の受身が効果的に用いられ、用例数も多くなる傾向が見られる。

4. まとめ

本稿では、近現代小説作家として夏目漱石、森鷗外、太宰治、川端康成の作品を取り上げ、作家別、人称別に小説における受身表現の使用傾向について考察した。その結果、受身表現の使用傾向に差のあった作家は、夏目漱石、森鷗外、太宰治である。

その中で一人称、三人称小説ともに「迷惑・恩恵」の用例数が多いのは、夏目漱石であった。漱石の一人称小説で「迷惑・恩恵」の用例数が多いのは、「坑夫」「坊っちゃん」であり、以上の作品は主観的な描き方の傾向が見られた。一方、三人称小説でも「三四郎」「それから」は、「迷惑・恩恵」の用例数が多く、三人称小説でも語り手が登場人物に近づき、「迷惑・恩恵」の感情を表す際に受身が使用される傾向が見られた。

次に、一人称小説で「迷惑・恩恵」の用例数が多く、反対に三人称小説で「中立」の用例数が多いのは、森鷗外である。一人称小説では夏目漱石と同様に主観的に描いているが、三人称小説では対象作品に「阿部一族」「山椒大夫」「高瀬舟」の歴史小説があり、これらは登場人物や出来事を客観的に描く場面が多いため、「中立」の用例数が多いと考えられる。

一方、一人称小説で「中立」の用例数が多く、三人称小説で「迷惑・恩恵」の用例数

した。祖父がこの自信を一層強めたのは村に赤痢が流行した時でした。前に書いた尼寺が改築される (②) ので、その仏像を私の家の座敷に預つてゐた年の夏でした。 「十六歳の日記」

「十六歳の日記」は、②4に挙げたように日記文ではあるが、「私」の目から客観的に出来事や人物を描写する描かれ方である。川端康成自身も「十六歳の日記」の「あとがき二」に「死に近い病人（祖父）の傍でその写生風な日記を綴る十六歳の私は、後から思ふと奇怪である。」と述べているように、この作品は、自分や周りを写生風に記したものであり、それが受身の使用にも「中立」の受身が多いことが反映されていると考えられる。

一方、三人称小説では、作品によって違いが見られる。「迷惑・恩恵」の10000字当たりの受身の用例数は、「千羽鶴」「眠れる美女」でそれぞれ6.7例、6.3例であり、「千羽鶴」に至っては、「中立」の用例数3.1例の2倍以上の高い数値である。

②5 菊治はちか子を嫌悪すると見せかけながら、稲村令嬢との縁談をちか子が強制すると見せかけてゐる。またちか子はさういふ風に利用される (①A) に便利な女である。ここを令嬢に見抜かれて (①A) ゐるか、菊治は真向から叩かれた (①A) 思ひをしたのだつた。 「千羽鶴」

②5の「千羽鶴」は、三人称制限視点であり、語り手が主人公「菊治」の側に立ち、主人公の目から見たもの感じたことが語られる。そのため、主人公「菊治」の側からの心理描写が多く描かれ、それに伴い「迷惑・恩恵」の受身の用例数も多いと考えられる。

②6 ⑦午後九時では早過ぎて娘が眠つてゐない、十一時までには眠らせておくと、(江口は)電話で言はれた (①B) 時、江口の胸がとつぜん熱い魅惑にふるへたのは、自分でもまつたく思ひがけぬことであつた。(中略) ⑧朝目をさましてからもさうだつた。⑨眠り薬がきいてゐたらしく、目ざめはふだんよりもおそい八時だつた。⑩老人のからだは娘のどこにもふれてゐなかつた。⑪娘の若いあたたかみとやさしい匂ひのなかに、幼いやうにあまい目ざめであつた。

⑫娘はこちらを向いてくれて寝てゐた。⑬こころもち頭を前に出して胸をひいてゐるので、うひうひしく長めの首のあごのかけにあるかないかの筋が出来てゐた。⑭長い髪は枕のうしろまでひろがつてゐた。⑮きれいに合はせた娘の臂から江口老人は目をそらせて、娘のまつ毛と眉をながめながら、きむすめであらうと信じると疑はなかつた。⑯江口の老眼には、娘のまつ毛も眉もひとすぢひとすぢは見えない近さにあつた。⑰うぶ毛も老眼には見えない娘の肌はやわらかく光つてゐた。⑱顔から首にかけてほくろ一つなかつた。⑲老人は夜半の悪夢なども忘

「中立」の意味を持つ受身が多いと考えられる。渡部（1974）が「津軽」を「紀行的な体裁をとりながら（中略）主観が抑制され、対象化された自己の像が表出されていて、（中略）すぐれた客観小説の体裁をそなえている。」と評したように、受身の分類からも客観的描写を表す②「主語が非情物の受身（中立）」が101例（54%）であり、他の小説と比べて際立って多く使用されていることが【表2】から確認できる。こうした小説の描かれ方によって受身の出現数にも大きく影響を受けたと見られよう。

一方、三人称小説では、「迷惑・恩恵」の受身が多く、10000字当たりの受身の用例数では「走れメロス」15.3例、「ロマネスク」13.9例である。

⑳ メロスは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはひつて行つた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて（①A）、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の前に引き出された（①A）。「この短刀で何をするつもりであつたか。言へ！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳を以て問ひつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれた（②）やうに深かつた。「走れメロス」

㉑は、語り手が主人公「メロス」の側に立ち、メロスの感情やメロスの目から見た相手の様子を近い距離で表現し、その中で「迷惑・恩恵」の受身が使用されている。

また、「ロマネスク」は、「仙術太郎」「喧嘩次郎兵衛」「嘘の三郎」の三つの物語から成り、それぞれ三人の主人公が最後の「嘘の三郎」の中で出会い、この小説は終わるが、田中（1991）が「現実を離れた非リアリズムの物語を目指しながらも、嘘の三郎が書いた作品のように自己の真実を秘めた太宰治の『私小説』たる面を合わせ持った作品」と評したように、この作品は三人称小説ではあるが、一人称的な私小説の面を持った作品であり、それが受身表現において「迷惑・恩恵」が多用される要因ではないだろうか。

3. 2. 4 川端康成作品における受身表現

川端康成における10000字当たりの受身用例数を見ると、一人称小説では「迷惑・恩恵」4.6例、「中立」4.9例に対し、三人称小説では「迷惑・恩恵」5.2例、「中立」5.1例と、一人称小説では若干「中立」が多く、三人称小説では若干「迷惑・恩恵」が多い結果となった。

そこで、作品毎に考察すると、一人称小説で「中立」の用例数が多いものは、「十六歳の日記」6.6例、「再婚者」5.0例である。

㉒（中略）また私の父は東京の医学校を出た医者でした。そこで祖父は父の西洋医術を幾分見覚えて、それを自分の漢方の薬術に加味し、久しい間田舎の人々に施薬してゐました。そして祖父はこの我流の薬術に強情な自信を持つてゐま

となる。ここでは、①「三四郎」が「女」に「云う」と、②「女」が「笑つた」動作によって③「三四郎」が「弾き出されたやうな心持ち」になり迷惑感を持った。その結果「三四郎」は「熱り出し、小さくなつた」。その後、「三四郎」が「首を出す」と、④「女」は「行つて仕舞つた」ことで、女が去って行った三四郎の悲しい心情を描いている。つまり、この箇所は、一連の動作に伴って現れた三四郎の心情が描かれており、このようなある人物の心情に入り込んだ使われ方は、心話文的な文章とも言える。三人称制限視点は、ある人物の側に立って語られるため、一人称テキストのような心話文になりやすく、こうした文章が多いほど、主人公の感情を表現する①A「有情物の主語が他動詞の動作の影響を直接受ける受身」の受身、さらに「迷惑・恩恵」の受身が多く使用される傾向がある。

3.2.3 太宰治作品による受身

太宰治作品における受身を10000字当たりの受身の用例数から見ると、一人称小説では「迷惑・恩恵」5.0例、「中立」8.7例に対し、三人称小説では「迷惑・恩恵」9.1例、「中立」7.5例である。太宰治作品では、一人称小説では「中立」が多く、三人称小説では「迷惑・恩恵」が多いという結果になり、先述の夏目漱石、森鷗外作品とは、異なった結果になった。これは、作品の個性に関係があるのではないだろうか。

太宰治の一人称小説で「中立」の受身の用例数が多いのは、「富岳百景」13.4例、「津軽」12.7例である。この二作品は主人公である「私」を中心に叙述しているが、出先や旅行先で「私」が見たもの、聞いたものを情景を交えて語る紀行文的な作風である。

- (21) 私は、井伏氏のゆるしを得て、当分その茶屋に落ちつくことになつて、それから、毎日、いやでも富士と真正面から、向き合つてゐなければならなくなつた。
 この時は、甲府から東海道に出る鎌倉往還の衝に當つてゐて、北面富士の代表観望台であると言はれ (2)、ここから見た富士は、むかしから富士三景の一つにかぞへられて (2) あるのださうであるが、私は、あまり好かなかつた。

「富岳百景」

- (22) 昔から、(津軽の山々は)日本三大森林地の一つとして数へられて (2) あるやうであつて、昭和四年版の日本地理風俗大系にも、「そもそも、この津軽の大森林は遠く津軽藩祖為信の遺業に因し、爾来、厳然たる制度の下に今日なほその鬱蒼をつづけ、さうしてわが国の模範林制と呼ばれて (2) ある。 「津軽」

(21)「富岳百景」(22)「津軽」は、一人称小説であり、主人公「私」を中心に先出先や旅行先で「私」が見たもの、聞いたものを情景を交えて語る作風である。そのため、風景描写や過去の自分を客観的に語る文が多く、一人称小説であっても、三人称小説のような

げられたり (①A) して、恐れ入って引き下がるうんでれがんがあるものか。

「坊っちゃん」

(17)(18)は、田口 (2006) が「坑夫」を「『草枕』よりも「主観」が色濃く投影された新しい『写生文』である」と述べ、小森 (1983) が「坊っちゃん」を「一貫した主人公の主観的な語り」と唱えるように、主人公の視点から主観的に体験や事象が語られ、それが受身の選択においても「迷惑・恩恵」の受身が多く選択される要因と考えられる。

一方、一人称小説の中で「中立」の用例数が多いのは「草枕」であり、10000字当たりの用例数は6.9例である。

(19) (中略) 鮮やかな紅の滴々が、いつの雨に流されて (②) か、半分溶けた花の海は霞のなかに果しなく広がって、見上げる半空には崢嶸たる一峰が半腹から微かに春の雲を吐いて居る。 「草枕」

(19)は、柴田 (2005) が「草枕」を「画工の『余』が主体となり語られていくが、『余』の行動が観照的態度に終始する」と指摘するように、【表2】を見ると、客観的描写を表す②「主語が非情物の受身(中立)」46例(40%)であり、②の受身が夏目漱石の一人称の他の小説と比べて多く使用されていることが確認できる。

また、三人称小説でも「迷惑・恩恵」が「中立」より多く使用されており、中でも「三四郎」「それから」は、10000字当たりの用例数が「迷惑・恩恵」4.8例、7.4例、「中立」2.8例、3.6例であり、「迷惑・恩恵」の受身のほうが、かなり多く使用されている。これらの作品は、語り手が主人公の側に立ち、話が展開される三人称制限視点である。

(20) 三四郎は鞆と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取つて、ただ一言、「左様なら」と云つた。女はその顔を凝とながめてゐた、が、やがて落付いた調子で、「あなたは余つ程度胸のない方ですね」と云つて、にやりと三四郎に向つて笑つた。三四郎はプラット、フォームの上へ弾き出された (①A) 様な心持がした。車の中へ這入つたら両方の耳が一層熱り出した。しばらくは凝つと小さくなつてゐた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果迄響き渡つた。列車は動き出す。三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔に何処かへ行つて仕舞つた。 「三四郎」

(20)は、語り手が主人公「三四郎」の側に立ち、「三四郎」の側の心理描写を描いている箇所である。ここで「三四郎」「女」の動作と心情を文末動詞に抜き出して表すと、

①「三四郎」は「女」に「云つた」→②「女」が「三四郎」に向かつて「笑つた」→③「三四郎」は「弾き出された心持がした」「熱り出した」「小さくなつてゐた」「首を出した」→④「女」は「行つて仕舞つた」

てゐた。四月二十九日に安養寺で切腹した。五十三歳である。藤本猪左衛門が介錯した。大塚は百五十石取の横目役である。四月二十六日に切腹した。介錯は池田八左衛門であつた。内藤が事は前に言つた。太田は祖父伝左衛門が加藤清正に仕へてゐた。忠広が封を除かれた時 (①A), 伝左衛門とその子の源左衛門とが流浪した。小十郎は源左衛門の二男で児小姓に召し出された者である (①B)。百五十石取つてゐた。殉死の先登は此人で、三月十七日に春日寺で切腹した。十八歳である。 「阿部一族」

- (16) 下京の町を離れて、加茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる (②) 水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは, 罪人にも許されて (②) ゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其額は晴やかで、目には微かなかがやきがある。 「高瀬舟」

(15)「阿部一族」(16)「高瀬舟」は、語り手が様々な登場人物の側に立つ三人称全知視点であるため、(15)の主語は「(寺本) 八左衛門」「大塚」「太田伝左衛門と源左衛門」「(太田) 小十郎」、(16)の主語は「水」「夜舟で寝ること」となり、語り手が作品世界の外側から登場人物や出来事を客観的に語る傾向が見られる。そのため、(15)(16)のように多くの登場人物や事柄や物が主語になり、「召抱る」「召し出す」の①B「有情物の主語が他動詞の動作の影響を直接受ける受身(中立)」や、「割く」「許す」の②「非情物の主語が動作の影響を直接受ける受身(中立)」表す受身が多く出現すると考えられる。

3.2.2 夏目漱石作品における受身表現

次に、夏目漱石の作品における10000字当たりの受身の用例数を見ると、一人称小説では「迷惑・恩恵」7.5例、「中立」3.3例であるのに対し、三人称小説では「迷惑・恩恵」5.9例、「中立」4.2例と、いずれも「迷惑・恩恵」の受身が多い。

一人称小説で「迷惑・恩恵」の用例数7.5例は、「中立」の用例数3.3例の2倍以上も使用され、特に用例数が多いのは、「坑夫」13.5例、「坊っちゃん」8.4例である。

- (17) それから(自分は)昨夜囲炉裏の傍で散々馬鹿にされた (①A) 事を思ひ出して、あの有様を(女)二人に見せたらばと考へた。ところが今度は正反対で、二人共傍にゐてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意気地のない、大いに(坑夫共に)苛められて (①A) ゐる自分の風体と、ハイカラの女を二人描き出したら、甚だ気恥づかしくなつて腋の下から汗が出さうになつた。 「坑夫」

- (18) (おれは)始めは喧嘩をとめに這入つたんだが、どやされたり (①A)、石をな

学研究においても、とりあげられることが多いからである。

【対象】 森鷗外	一人称小説「舞姫」「百物語」「二人の友」「雁」 三人称小説「青年」「阿部一族」「山椒大夫」「高瀬舟」
夏目漱石	一人称小説「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「草枕」「坊夫」 三人称小説「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」
太宰治	一人称小説「富嶽百景」「女生徒」「津軽」「斜陽」 三人称小説「猿面冠者」「ロマネスク」「走れメロス」「火の鳥」
川端康成	一人称小説「十六歳の日記」「青い海黒い海」「伊豆の踊子」「再婚者」 三人称小説「雪国」「千羽鶴」「山の音」「眠れる美女」

3.2 「一人称小説」「三人称小説」の受身の分類

調査対象の作家の小説作品を一人称小説と三人称小説に分け【表1】の受身形の分類に則して分類した結果が【表2・3】である。ここでは、一人称小説と三人称小説の違いと受身の意味の相関の違いを確認するため「迷惑・恩恵」と「中立」に分けて表に示した。小説テキストの長さは作品毎に違うが、各作品を10000字あたりの受身の用例数を算出することによって作品毎の受身の比率を調査できると考え、空白を除くテキストの総文字数をもとに10000字当たりの受身の用例数を算出し、表に示した。その際「、」「。」「英数字」を1字として算出した。以下、各作家の作品を取り上げ、作家・人称別に受身を比較していく。なお、表において紙幅の都合上作品名には頭2字のみ表記した。

3.2.1 森鷗外作品における受身表現

まず、森鷗外作品における受身を10000字当たりの受身の用例数から見ると、一人称小説では「迷惑・恩恵」8.4例、「中立」7.0例に対し、三人称小説では「迷惑・恩恵」6.5例、「中立」9.0例と、一人称小説では「迷惑・恩恵」の受身が多いが、三人称小説では「中立」の受身が多い。一人称小説で「迷惑・恩恵」の受身の用例数が多いのは、次項で述べる夏目漱石の結果と同じであるが、ここでは、三人称小説で「中立」の受身が多いことに着目した。

森鷗外の三人称小説で10000字当たりの「中立」の用例数が多いのは、「高瀬舟」17.9例、「阿部一族」17.2例である。これらの作品は、歴史小説である。

*各例文で、 部分が主語、 部分が受身の動詞、 部分が動作を表す句、 部分が心情に関わる句である。()は、受身の種類を表す。

- (15) (寺本) 与左衛門の子が八左衛門で、大阪籠城の時、後藤基次の下で働いた事がある。細川家に召抱られてから (①B), 千石取つて鉄砲五十挺の頭になつ

太宰治

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 10000字 合計	総文字数	
	①A		④A		受身例／ 10000字	①B		④B		受身例／ 10000字			合計
	例(%)	③	例(%)	小計		例(%)	小計	例(%)	小計				
猿面	8(27)	0(0)	7(23)	15(50)	10.0	5(17)	10(33)	0(0)	15(50)	10.0	30(100)	20.0	14979
ロマ	21(54)	1(3)	4(10)	26(67)	13.9	6(15)	7(18)	0(0)	13(33)	7.0	39(100)	20.9	18673
走れ	12(50)	2(8)	1(4)	15(63)	15.3	5(21)	4(17)	0(0)	9(38)	9.2	24(100)	24.5	9806
火の	15(36)	1(2)	2(5)	18(43)	4.8	16(38)	8(19)	0(0)	24(57)	6.4	42(100)	11.2	37481
小計	56(41)	4(3)	14(10)	74(55)	9.1	32(24)	29(21)	0(0)	61(45)	7.5	135(100)	16.7	80939

川端康成

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 10000字 合計	総文字数	
	①A		④A		受身例／ 10000字	①B		④B		受身例／ 10000字			合計
	例(%)	③	例(%)	小計		例(%)	小計	例(%)	小計				
雪国	31(37)	1(1)	7(8)	39(46)	5.4	21(25)	25(29)	0(0)	46(54)	6.3	85(100)	11.7	72738
千羽	35(53)	1(2)	9(14)	45(68)	6.7	14(21)	7(11)	0(0)	21(32)	3.1	66(100)	9.9	66913
山の	42(34)	0(0)	17(14)	59(48)	4.0	33(27)	29(24)	2(2)	64(52)	4.4	123(100)	8.4	146719
眠れ	32(37)	2(2)	5(6)	39(45)	6.3	27(31)	19(22)	2(2)	48(55)	7.7	87(100)	14.0	62296
小計	140(39)	4(1)	38(11)	182(50)	5.2	95(26)	80(22)	4(1)	179(50)	5.1	361(100)	10.4	348666

【表3 「三人称小説」の受身の分類】

森鷗外

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 10000字 合計	総文字数	
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B	小計	受身例／ 10000字			
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)			
青年	55(36)	3(2)	13(9)	71(47)	5.9	25(16)	56(37)	0(0)	81(53)	6.7	152(100)	12.6	120986
阿部	21(30)	0(0)	4(6)	25(35)	9.4	29(41)	15(21)	2(3)	46(65)	17.2	71(100)	26.6	26667
山椒	8(29)	0(0)	3(11)	11(39)	5.2	12(43)	5(18)	0(0)	17(61)	8.0	28(100)	13.2	21176
高瀬	8(35)	0(0)	0(0)	8(35)	9.6	11(48)	4(17)	0(0)	15(65)	17.9	23(100)	27.5	8362
小計	92(34)	3(1)	20(7)	115(42)	6.5	77(28)	80(29)	2(1)	159(58)	9.0	274(100)	15.5	177191

夏目漱石

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 10000字 合計	総文字数	
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B	小計	受身例／ 10000字			
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)			
虞美	77(41)	7(4)	11(6)	95(50)	4.9	19(10)	76(40)	0(0)	95(50)	4.9	190(100)	9.8	194172
三四	59(48)	7(6)	11(9)	77(63)	4.8	25(20)	19(16)	1(1)	45(37)	2.8	122(100)	7.6	160058
それ	98(52)	16(8)	14(7)	128(67)	7.4	31(16)	31(16)	0(0)	62(33)	3.6	190(100)	11.0	172062
門	65(38)	9(5)	17(10)	91(54)	6.7	26(15)	52(31)	0(0)	78(46)	5.7	169(100)	12.4	136382
小計	299(45)	39(6)	53(8)	391(58)	5.9	101(15)	178(27)	1(0)	280(42)	4.2	671(100)	10.1	662674

太宰治

	迷惑・恩恵				中立				合計	受身例／ 10000字 合計	総文字数		
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B				小計	受身例／ 10000字
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)				例(%)	例(%)
富岳	12(36)	0(0)	1(3)	13(39)	8.7	14(42)	6(18)	0(0)	20(61)	13.4	33(100)	22.1	14950
女生	15(48)	0(0)	2(6)	17(55)	5.5	3(10)	11(35)	0(0)	14(45)	4.5	31(100)	10.0	31088
津軽	37(20)	2(1)	8(4)	47(25)	4.2	39(21)	101(54)	1(1)	141(75)	12.7	188(100)	16.9	111144
斜陽	41(48)	1(1)	5(6)	47(55)	5.3	15(17)	23(27)	1(1)	39(45)	4.4	86(100)	9.7	88846
小計	105(31)	3(1)	16(5)	124(37)	5.0	71(21)	141(42)	2(1)	214(63)	8.7	338(100)	13.7	246028

川端康成

	迷惑・恩恵				中立				合計	受身例／ 10000字 合計	総文字数		
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B				小計	受身例／ 10000字
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)				例(%)	例(%)
十六	4(22)	0(0)	2(11)	6(33)	3.3	4(22)	7(39)	1(6)	12(67)	6.6	18(100)	9.9	18207
青い	2(29)	0(0)	2(29)	4(57)	3.4	2(29)	1(14)	0(0)	3(43)	2.6	7(100)	6.0	11673
伊豆	5(36)	0(0)	1(7)	6(43)	3.3	5(36)	3(21)	0(0)	8(57)	4.5	14(100)	7.8	17937
再婚	18(35)	2(4)	8(15)	28(54)	5.9	9(17)	15(29)	0(0)	24(46)	5.0	52(100)	10.9	47536
小計	29(32)	2(2)	13(14)	44(48)	4.6	20(22)	26(29)	1(1)	47(52)	4.9	91(100)	9.5	95353

【表2 「一人称小説」の受身の分類】

森鷗外

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 1000字 合計	総文字数	
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B	小計	受身例／ 10000字			
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)			
舞姫	12(46)	0(0)	3(12)	15(58)	9.7	6(23)	5(19)	0(0)	11(42)	7.1	26(100)	16.8	15465
百物	5(23)	0(0)	2(9)	7(32)	5.6	5(23)	10(45)	0(0)	15(68)	12.0	22(100)	17.6	12493
二人	9(64)	0(0)	0(0)	9(64)	8.0	3(21)	2(14)	0(0)	5(36)	4.5	14(100)	12.5	11233
雁	52(46)	4(4)	8(7)	64(57)	8.7	11(10)	37(33)	0(0)	48(43)	6.5	112(100)	15.2	73470
小計	78(45)	4(2)	13(7)	95(55)	8.4	25(14)	54(31)	0(0)	79(45)	7.0	174(100)	15.4	112661

夏目漱石

	迷惑・恩恵					中立					受身例／ 10000字 合計	総文字数	
	①A	③	④A	小計	受身例／ 10000字	①B	②	④B	小計	受身例／ 10000字			
	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)	例(%)			
吾輩	108(47)	15(6)	26(11)	149(64)	4.8	19(8)	64(28)	0(0)	83(36)	2.7	232(100)	7.4	312357
坊っ	60(73)	5(6)	8(10)	73(89)	8.4	2(2)	7(9)	0(0)	9(11)	1.0	82(100)	9.4	86826
草枕	37(32)	7(6)	14(12)	58(50)	7.0	10(9)	46(40)	1(1)	57(50)	6.9	115(100)	13.9	82452
坑夫	153(63)	10(4)	23(9)	186(76)	13.5	25(10)	33(14)	0(0)	58(24)	4.2	244(100)	17.7	138053
小計	358(53)	37(5)	71(11)	466(69)	7.5	56(8)	150(22)	1(0)	207(31)	3.3	673(100)	10.9	619688

つた。

「それから」

目的語が有情物主語の身体部位や所有物を表すものに用いる。(9)「張られる」のように「迷惑」、(10)「賞められる」のように「恩恵」の意味に用いられることがある。

(11) その(=信吾の)心底が抑へられ、ゆがめられて、夢にみすばらしく現はれた。

「山の音」

所有物が目的語でなく主語になる際、(11)「信吾の心底が」のように所有物の持ち主が「信吾」などの有情物の場合、有情物が「迷惑・恩恵」を受けると考える。

(12) 枝繁き山桜の葉も花も、深い空から落ちた儘なる雨の塊まりを、しつぱりと宿して居たが、此時わたる風に(雨の塊が)足をすくはれて、居たゝまれずに、仮りの住居を、さら〜と転げ落ちる。

「草枕」

(12)では、「雨の塊が足をすくはれ」とあるように、本来「非情物」である「雨の塊」は「足」を持たないが、雨の塊に足を付けて擬人化された場合には、有情物と考える。

B：〈「中立」と解される場合〉

(13) 嫂に手をひかれて、祖母も出て来た。

「津軽」

(14) そのうち脈を取られたので漸く気が付いた。

「三四郎」

(13)「嫂に手をひかれ」、(14)「脈をとられ」のように、「中立」を表す受身も立てた。

以上を踏まえて基本的な受身の分類を表にすると、以下のようになる。

【表1—受身の分類】

分 類	主語	意 味	例 文
①A 有情物主語が他動詞の動作の影響を直接受ける受身	有情物	迷惑・恩恵	(1)(2)
①B 有情物主語が他動詞の動作の影響を直接受ける受身	有情物	中立	(3)(4)
② 非情物主語が動作の影響を直接受ける受身	非情物	中立	(5)(6)
③ 有情物主語が自動詞の動作の影響を間接的に受ける受身	有情物	迷惑	(7)(8)
④A 有情物主語が動作の影響を所有物を介して受ける受身	有情物	迷惑・恩恵	(9)(10)(11)(12)
④B 有情物主語が動作の影響を所有物を介して受ける受身	有情物	中立	(13)(14)

3. 小説テキストにおける受身形

3.1 受身の調査対象と調査方法

本稿では、小説テキストの受身の特徴を掴むため、森鷗外、夏目漱石、太宰治、川端康成の作品、全32作品を「一人称小説」「三人称小説」に分け、受身の調査を行った。著名な作家をとりあげるのは、できるだけ長いテキストで一人称・三人称小説どちらも執筆している作家であり、さらに、これらの作家は後述のように、すでに文学研究や語

① 有情物の主語が他動詞の動作の影響を直接受ける受身

A：〈「迷惑・恩恵」のニュアンスと解される場合〉

- (1) (おれはみんなから) 今日の新報に辟易して学校を休んだ杯と云はれちゃ一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。 「坊っちゃん」
- (2) (吾輩は) 賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。 「吾輩は猫である」

B：〈「中立」と解される場合〉

- (3) 宗助は(書生に) 一番奥の方にある一脚に案内されて、是へと云はれるので、踏段の様なものの上へ乗つて、椅子へ腰を卸した。 「門」
- (4) 「修つちやあ。」と呼ばれて、振り向くと、その金丸の娘さんが笑ひながら立つゐる。 「津軽」

上記のように受身の分類には、被動作主にとっての「迷惑・恩恵」と「中立」の意味の受身が存在すると考える。

② 非情物の主語が動作の影響を直接受ける受身

〈「中立」と解される場合〉

- (5) 棧の目の細かい障子は新しく貼り替へられ、それに日射しが明るかつた。 「雪国」
- (6) さうして裏にも、横にも同じ様な窮屈な家が建てられてゐる。 「それから」

非情物主語の受身は、動作を行った動作主が背景化され、被動作主が全面に出て主題化し主語となる。その結果、主語となった非情物に起きた事象として表現される。

③ 有情物の主語が自動詞の動作の影響を間接的に受ける受身

〈「迷惑」と解される場合〉

- (7) (吾輩は) こゝで人に来られては大変だと思つて、愈躍起となつて台所をかけ廻る。 →こゝで人が吾輩に来て…。(非文) 「吾輩は猫である」
- (8) (池上先生は) お前に死なれたら、僕のことをよく知って、よく覚えてゐてくれる人間が、この世にゐなくなると思ふと、さびしくてたまらないと言つたので、… →お前は池上先生に死んだら…。(非文) 「再婚者」

この動作の影響を間接的に受ける受身は、能動文にすると、非文になる。

④ 有情物の主語が動作の影響を所有物を介して受ける受身

A：〈「迷惑・恩恵」のニュアンスと解される場合〉

- (9) (吾輩は) 此帯へじやれ付いて、いきなり(主人に) 頭を張られたのは此間の事である。 「吾輩は猫である」
- (10) (三千代が) 始めて国から出て来た当時の髪を代助から賞められた事があ

以上、先行研究で受身に「迷惑・恩恵」と「中立」の意味用法があるとされているが、受身に「中立」のみならず「迷惑・恩恵」の意味が付与されるのは、何故であろうか。

柴谷(1997)は、「迷惑・恩恵」の受身が使用される度合いが強くなるのは、主語への心理作用に「迷惑」の補給がなされる場合であるとしている。例えば「太郎が次郎に(野良犬の)頭をなぐられた」の受身は、「次郎が野良犬の頭をなぐった」という行為と主語の「太郎」に近接性が保証されないが、「太郎が気になっていた野良犬が殴られた」など「太郎」と問題の事象に何らかの関連性がある場合に迷惑の意味補給がなされ、「迷惑」の受身が使用される。このように、主語の心理作用に意味補給がされて、「迷惑」の受身が使用されるとしている。本稿では、「太郎が次郎に頭を殴られた」など主語の身体や所有物が間接的に影響を受けた場合や、「私は先生に叱られた」の「叱られた」のように動詞の語彙の意味により「迷惑」の意味になるものを典型的な受身と考えて、さらに前記の意味補給がされるものも含めて「迷惑」の受身と認めることとした。

こうした主語の心理作用を多く表現するものに、小説テキストがある。日本語における小説テキストは、大きく一人称小説と三人称小説^③に分けられる。一人称小説は、語り手が自らを「私」として作中世界に登場させ、主観的に「私」の目に映ること、感じたことを中心に語る。三人称小説は、大きく制限視点と全知視点^④がある。三人称制限視点は、語り手が主人公または作中の一人物の視点に同化させ語る。一方、三人称全知視点は、語り手が登場人物や事象を全て知り尽くし、観察的に語る。こうした一人称や三人称の設定の仕方は形式的であり、実際は人称の違いといっても、作家の個性や作品の描かれ方によって様々なタイプがある。

そこで、本稿では、個々の作家の描き方の違いを見るために、人称別・作家別に受身を分類し、出現数を分析し、「迷惑・恩恵」「中立」のどちらの受身をとるかという事象を観察し、小説テキストにおける受身表現の使用傾向とその要因を考察していきたい。

2. 受身における分類

本稿で扱う「迷惑」とは、動作を受けることによって主語に立つものが「迷惑」を受けける事態として表現するものである。「恩恵」とは、動作を受けることによって主語に立つ物が「恩恵」を受けた事態として表現するものである。「中立」とは、動作を受けても主語に立つ物の感情の変化が伴わないことを意味する。これを踏まえて、本稿では以下のように受身形の用法を分類することとする。なお、以下にいう有情物とは、心・感情を持つ人間や動物を指す。

小説テキストにおける受身表現の使用傾向

山 本 和 恵

0. はじめに

日本語の受身表現には、動作の影響を直接受ける有情物主語の受身、動作の影響を間接的に受ける有情物主語の受身、非情物主語が動作の影響を直接受ける受身などがあり、受身の意味分類が多岐であることは、松下（1930）、三上（1972）、寺村（1982）などを始め、多く論じられている。では、なぜ能動形でなく受身形が用いられるのだろうか。

本稿では、特に小説テキストにおける受身の使用傾向を調査し、受身表現が使用される要因を探りたい。

1. 先行研究

日本語の受身表現には、意味的側面から見ると「中立（非情）の受身」と「迷惑・恩恵の受身」がある。古くは、松下（1930）が日本語の受身を「人格被動」とし、受身の主体になるものは、害や中には有難迷惑な利害を感じずという意味で人格が認められるとし、人格被動を(一)自己被動、(二)所有物被動、(三)所有物自己被動、(四)他物被動と四種類^①に区別し、四種とも自己の利害であるとした。所有物が受けた動作であっても、その害は自己へ受けた被害になり、受身が自己の利害（迷惑）の受身であるという。

三上（1972）は、日本語の受身を「まともな受身」と「はた迷惑の受身」の二つ^②に分類している。その中で、三上は、受身を「動詞の意味次第で恩恵にも迷惑にもなり、まん中で平気なことも起こる」と述べ、日本語の受身は意味分類において「迷惑・恩恵」の受身だけではなく、まん中という「中立」的な受身も存在することを指摘している。

寺村（1982）は、日本語における受身を「直接受身」「間接受身」の二つに大別した。

(A) 直孝ハ祖母ニ育テラレタ。 (B) 直孝ハ父母ニ死ナレタ。

「直接受身」とは例文(A)のように主語が動作の影響を直接受けるもので、「間接受身」とは、例文(B)のように他者の自動詞の動作や主語の所有物を通して動作の影響を間接に受けるもので、「直接受身」「間接受身」どちらにも「迷惑」の場合があるとする。